
Myth of contract and liberating

塩結G音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Myth of contract and liberating

【Nコード】

N75460

【作者名】

塩結G音

【あらすじ】

四人の英雄の物語。
今回は、ヒエンとソリダスター。

ここはカランコエ国、首都ミラベラ。国としての規模は小さいが商業としてかなりの発展を遂げた国である。

そのゴールの酒場に二人の男がテーブルについていた。

一人の男は眼鏡越しに静かに本を読みふける。ただ、彼の髪は額のところで2本の触角のように立ち上がって下へ流れる長い黒髪。もう一人は紫髪、緋色フードを肩にテーブルに突っ伏すようにしていた。

二人とも旅人の装いではあるが身体が細く、装備からも戦士でないことは確かだ。

「近く戦争が始まるかもしれない」「相手は何処だ?」「知るか」

「皇子がさらわれたと聞く」「お姫様がさらわれたらしい」「えっ、国王じゃねえの?」

酒場の喧騒、噂話はこの二人にはどこ吹く風の静けさだった。

「うそつき」

店に入って二時間。紫髪の男が注文以外でやつと口を開いた。

「何がです?」

黒髪は本から視線を上げもせず問い返す。

「ソリダスター、お前。この国は美人が多いって言っただろ?」

「はい、いいましたが?」

「どこがだよ!」

紫髪は勢いよく立ち上がった。酒場が一気に静まり返る。

「この国に入って目に付くのは男・男・男!この店だって看板娘一人いない!!」

「なんなんだよ、この国は野郎しかない!!ホモの国か!!!」
「説明が足りなかったようですね、ヒエン。」

この国では女性は日光を浴びるのをヨシとしないのですよ。日中

に女性と会うのは難しいですよ」

「先、言えよ」

「それより、」

やっと黒髪、ソリダスターは本を閉じ目線を上げた。

「この状況、どうするんです？」

紫髪、ヒエンが辺りを見渡すと血気盛んな、戦士風の男達に囲まれていた。

「おや？」

ヒエンは今、気がついたように席についた。

「おいっ」

囲む男の一人、一番体格のよい男が口を開いた。

「俺らの国がなんだって、こら」

ヒエンは肩を落としてため息をついた。そして、

「ダイダイ」

仲間の名を呼ぶ、が

「彼は今は一緒じゃありませんよ」

ソリダスターが返事をし、自身はページをめくる。

「……使えない奴」

二人が囲む木のテーブルが壊れた。

「無視すんじゃねえよ」

先の男がブロードソード（真直ぐな剣）を突き刺したのだ。
「うるせえな」

ヒエンが小さく言う。男がそちらを向く。

「あん？俺を『豪腕の……』」

「うるさいって、言ってるんだよ……！」

ヒエンは右手の中指につける、蛇型の指輪を掲げた。

「ぜえっ。やりすぎたかな？」

店から200m離れた路地にヒエンは身を潜めていた。
全力疾走で息が上がっている。

「まったくです」

その対面にソリダスターがいまだ本を読みふけていた。

ヒエンよりは体力があるので息はきれてない。

「女がいらないからって店を半壊させるなんて」

彼らがいた、先の店『青鯨亭』は酒場である一階が見晴らしよく、半壊状態である。

ヒエン一人で破壊した。

「でも、看板娘のいない酒場なんて存在意味ない気がしない？」

「知りません。それより、これからどうする……」

「いたぞ……」

表通りから声が響く。この国の憲兵であった。

「やっべ」

二人が逆方向に走ろうとするとすでに憲兵が待ち構えていた。

「罪：器物破損、街での呪文使用、傷害」

二人の前に法衣を着た老人が淡々と罪を読み上げた。

ヒエンとソリダスターは拘束具を着せられ、道具は全て取り上げられている。

老人と二人、あとは書記官がいるだけだ。

「申し開きは？」

老人はヒエン・ソリダスターに視線を向ける。

「ありま、せん」

「ヒエン一人の罪であって、私には関係ありません」

「ソリダスター！お前がこんなダサイ国に連れてこなければ……」

「ダサイ国？」

老人の視線が強くなる。心象を悪くしたようだ。

「いや、そういう意味じゃ……」

「それでは、二人に罰則を言い渡す」

手元の書類目を向ける。

「それぞれに禁錮五年および罰金1千Gと修復費」

「えっ……!」

ヒエンの声が響く。ソリダスターはため息をついた。

「この国での罰は禁錮と罰金制度です。当然の結果でしょう」

「そんなこといったって、高すぎるし長すぎるだろ」

「……ただし」

裁判官である老人が改めてこちらを向いた。

「特別、優遇してやっていい」

そこには笑顔があった。

二人は王宮、玉座の前に連れてこられた。つまり、王の前だ。

王の横には従者が付添う。

宮廷魔術師がいて、周囲には衛兵がずらりと並んでいる。

「ま、典型的風景」

「黙れ、国王陛下の御前であるぞ……!」

ヒエンがいらぬ口を開いて怒られる。

王に先の裁判官が歩みを進める。

「このモノたちでは、いかがでしょう?」

「信頼、できるのか?」

王は頬杖をついたまま尋ね返す。

「はい。犯罪者ではありますが、腕は確かであります。

何しろあの『豪腕のテリアン』一味を倒したものですから」

衛兵がざわめく。

ヒエンが横にいる衛兵に尋ねる。

「有名、なの? あいつ?」

「当たり前だ。あのように身を落とす前はゴブリン20体を一人で退治したと有名だったのだぞ。

ま、そのうち我ら治安部隊が彼を倒すつもりであったがな」

「ふ〜ん。ザコじゃん」

ヒエンは興味なさげに前に向き直った。

「分かった。ジイ、お前を信頼しよう」

国王はそれから、力なく語った。

娘であるリリア王女がウォーケンという魔術師にさらわれた。その救出を依頼する。

ウォーケンも捕らえるか殺すかをすること。

報酬は2千G。旅人には十分な量だ。

「つかぬ事を、聞きますけど」

ヒエンが口を挟む。

「なんで正規軍を使わないんですか？」

「それは、」

「今、この国は隣国：カーマッドとの間に不穏な空気が流れている。無駄な、兵力を割くわけにはいかない、っていうことでしょう？」

ソリダスターがすらすらと答えて見せた。

「そ、そのとおりだ」

答えようとした王が慌てる。

「で、依頼を受けなければ？」

衛兵達が腰の剣に手を当てた。二人の前に立つ裁判官がこちらを向く。

「先の罰に色々おまけがつくことになるが」

「分かりました。お任せください」

「引き受けます」

ヒエン、ソリダスターは了承した。

「そうか、引き受けてくれるか。それでは」

王が王宮魔術師に目線を送る。彼が口を開く。

「皆のもの、部屋を出よ」

言われたとおり、裁判官・衛兵が部屋を出る。

衛兵の何人かはヒエンの肩を叩き、

「心優しき姫を頼む」「必ず遂行するのだぞ」
激励して出て行った。

残ったのは国王と魔術師、ヒエンとソリダスターの4人である。

「それでは……」

王宮魔術師は息を吸うと目を閉じ、複雑な身振り長い呪文の詠唱を始めた。

「あれは？」

ヒエンがソリダスターに尋ねる。

「この地に伝わる地域魔法。黙ってください？」

そのソリダスターの表情は真剣にその指先の動きと口元を見ていた。

と、空中にぼんやりとした影が浮きはじめ、やがてそれがはつきりとした映像を結ぶ。

粗末で小さい部屋の一室を斜め上からみおろした光景だ。

部屋には木製のテーブルと椅子とが一組だけある。

テーブルには大きく分厚い本が開いており、そのほかに巻物や奇妙な形のフラスコなどが乱雑に置かれている。

部屋には男女二人の人影もある。

男は30歳前後か、黒いローブをまとい、テーブルに左手を添え、寄りかかるように立っている。

右手にはまがまがしげな杖をもっている。

背中からの映像で顔は見えないが、視線が部屋の隅に向けられていることは分かる。

そこには20歳前の少女がいる。

「あ、美人」

ヒエンは思わず声を上げた。

高価そうなドレスをまといっているが、かなり汚れている。
男が口を開いた。

「いまのうちにせいぜいおれのことを恨んでおくことだ。」

神殿が見つければ……まあ、あと数日も調べればわかるだろう……
お前の心はおれのものなのだからな」

少女が頭を振り、答える。

「恨みなど持っていないません……。ただ、あなたはかわいそうな人だ
と思います」

男はそれを聞き、ククツと忍び笑いをもらし、左手でテーブル上の
一組の指輪をもてあそびながら言った。

「そうだろうとも。そういうと思ったよ。いい性格の娘だ……。
だからこそ、この指輪が役に立つのだ」

やり取りの間も王宮魔術師は低い声で呪文を呟き続け、王は心配
そうに映像を見上げる。

と、突然男が振り返り、まるで、向こうからもこちらが見えてい
るかのようにこちら、空中を睨みすえた。

「いかん!!」

王宮魔術師が言葉を漏らすと同時に男の杖がまばゆい光を発し、
周囲が閃光につつまれる。

光が消えると、映像は消え去っており、王宮魔術師は目を押さえ
うずくまっていた。

「衛兵!!」

王が兵を呼び、魔術師を支え立ち去る。

ヒエンとソリダスターは城門まで衛兵に挟まれながら歩くことにな
った。

二人の手にはまだ拘束具がつけられたまま。

「ウォーケンとはどのような人物なのですか？」

ソリダスターが尋ねると先頭を歩く、隊長らしき人物が答える。

「流れ者の魔術師だったと聞く。この国の魔術師ギルドでも何度か
見かけたとか。

しかし、彼自身は高レベル魔術師ではない」
「手に持っていた杖、ですね」

ソリダスターの問いに隊長がうなずく。

「『グレイ・ロッド』と呼ばれるあの杖はギルドの宝であった。その杖を盗み、ウォーケンが姫をもさらったのだ」

城門まで来ると拘束具はやつと外してもらえた。

衛兵達はそれを持って立ち去る。

残った隊長が地図と前金500G、それぞれの道具を手渡した。

「この地図にはウォーケンが潜んでいる塔が書いてある。行って、姫様を救出してください」

隊長は敬礼をした。ソリダスターは会釈を返した。

「おまかせください」

ヒエンは自分の薄い胸を叩いた。美女が出るところである。

二人はその足で荷馬車を借り（運転手つき）、片道三日の塔へと旅立った。

その馬車の中、ヒエンは先に見た姫を思い描いていた。

「あきない男ですねえ」

ソリダスターは本から目を上げずにヒエンに呼びかけた。

女性が出てくれば、いや美女が出てくれば立場を変える、それがヒエンである。

ヒエンは口をゆがめて見返す。

「あんたもな。それ、なんの本だよ」

「『ポセイドンの経典 第四十八版』イサルキア版」

『ポセイドンの経典』とはソリダスターの信仰する（？）宗教の聖書であるが、当然、僧侶である彼はそれを暗記するまでに読み込んでいる。

しかし彼はそれだけであきたらず、版を重ねることに出てくる誤差、地域による差を見つけることが趣味になっている。

いや、この聖書だけではなく、本という本全てを読破しようとし

ている。

そしてこの男は今まで読んだ本の内容、だけにとどまらず見たこと聞いたこと、全てをその頭脳の中に蓄積しているのだ。

先の王宮魔術師の映像術も恐らくは覚えたに違いない。

「おもしろい？」

「いや、まったく」

表情なくページをめくる。

「それよりも、彼。どうするのです？」

「ウオーケン、とか言っただけ？ 焼き殺す？」

ヒエンは右手を上げた。指輪が光る。

「さあ？ できますかね？」

彼自身は構いませんが、『グレイ・ロッド』は厄介ですよ？ 貴重品ですし」

「この杖とどっちが貴重？」

ヒエンは左脇に置く、梟頭の杖を持ち上げた。

ソリダスターはそれすら見もせず答える。

「さて、レベルはそちらの方が高そうですが、グレイ・ロッドには意思がありますから」

「ふうん、めんどくさいな」

ヒエンは興味を失い、操縦席に座るおじさんに寄った。

「なあ、おっさん。リリア王女って美人？」

「ああ、この国一の美人だとも」

「……あれが一番となると他はアテにできないか」

ヒエンは小さく毒づいたがおじさんには聞こえなかったようだ。

「綺麗なだけじゃなくて、心もお優しい人だぞ。」

誰にでも慈悲の心で接してくださる、この国一のお宝じゃ」

「……その値段が2000Gねえ」

再び毒づいたがやはりおじさんには聞こえなかったようだ。

それからおじさんの王女自慢は続き、ヒエンは適当に相槌を打った。

馬車は問題なく、ウォーケンの塔に着く事ができた。
ウォーケンの塔は荒野にポツンと立っていた。

石造りで、三階建ての丸い塔と小さな二階のある四角い家がくっついたような建物だ。

それが見える位置で馬車を降り、二人は塔へと向かった。
塔の前では五体の人間型の生物が見かけられる。

さらに近づくとそれはゴブリン（小柄なヒューマノイド）と分かった。

それぞれは石弓を持ち、こちらに狙いを定めている。そして口々に何かをわめいている。

「何だって？」

ゴブリン語を知らないヒエンはソリダスターに尋ねた。

「見ての通り、警告ですよ。それ以上近づくなつとね」

「でも、近づかないとお姫様は助けられないだろう？」

二人はマント、ローブを翻しひるむことなく前進した。

ゴブリンたちはその場に崩れ落ちた。

ヒエン、ソリダスターは無傷。

ゴブリンたちは石弓を放った。

しかしそれよりも早くヒエンは左手の杖に魔法 結界 を唱えさせた。

彼は杖に魔法を唱えさせたのだ。彼自身は魔術師呪文を唱える事ができない。

全ての石弓が弾かれる。

そしてヒエンはそのまま歩み続けた。

その間に詠唱の準備を済ませたソリダスターが胸に下げる青いペ
ンダント、シンボルを掲げ 神雷 を唱えた。

ゴブリンは避けることなく、晴天の落雷に気絶したのだ。

二人は塔の周りをぐるっと調べ、四角い部屋の裏と表、それぞれに一つ扉がある事が分かった。

「どちらにします？」

「正々堂々、裏手から」

鍵のかかってない裏手から二人が入ると向こうに扉が見えた。

何の迷いもなく、ヒエンが手をかけると突然、入ってきた扉が閉まった！

そして続けてゆっくりと天上が落下してきたのだ！！

「おや、トラップですね」

「おお、そうだな」

落ち着いたソリダスターとヒエン。

ソリダスターは入ってきた扉を確かめるが鍵がかかっている。

それでも彼は笑みを浮かべている。

ヒエンは奥の扉もガチャガチャするが動きそうもない。

「ふんっ」

「どうします？」

ソリダスターはその隣で冷静に尋ねる。

「どこにも道がない、ならば」

ヒエンは右手の指輪、蛇の指輪を掲げた。

するとそこからとてつもない火炎が噴出され、扉は焼き消えた。

「作るのみ」

天井が動きを止めたのでヒエンとソリダスターはゆっくりそこから出た。

「ふむ」

ソリダスターは扉を向こう側から覗き込んだ。

それは扉ではなく、石でできた壁にしか過ぎず、ヒエンは壁を焼き消したのだ。

出てきたのはそこは表と奥へつながる細い道であった。

ソリダスターはわざわざ表に出、二階部分につり天井の機械が置いてある部屋があることを確認した。

奥へと進む。

二階に上がるとそこには身長三メートルはある、オーガー（怪力巨大なヒューマノイド）がいた。

左手には巨大なタワーシールド（凸型の大きな長方形盾）を持ち、そしてそこにはでかかと『立ち入り禁止』と書いてある。

さらに右手には彼の体格にあったアセガイ（長槍）を構えていた。

「なんだ、こいつ？」

「見張り、でしょう」

彼は三階への階段をふさぐように立っている。

こちらにアセガイを向け、ヒエンに突きつけてきた。

ヒエンはそれを飛んでかわし、杖を構えた。

鼻の口から衝撃波が飛ぶ。それをオーガーは盾で受ける。

続けて、横でシンボルを持ち詠唱していたソリダスターに、アセガイを振るう。

ソリダスターもかわしたが集中力が切れ、詠唱が止まってしまった。

「やりますね」

「ホント」

しみじみ言うソリダスターとヒエン。

「じゃ、僕も少しホンキになりますか」

ヒエンは左手の杖ではなく、右手の指輪に集中力を込めた。

次の瞬間、蛇の形をした指輪からものすごい業火が噴出した。石壁に穴を開け、酒場を一つ半壊させた炎。

オーガーは盾でそれを防いだ、が盾は簡単に燃え尽きた。

彼が持つは右手のアセガイだけ。

「どうだあ」

余裕を見せるヒエン。すると上階から声が響いた。

「あと10分だけでもたせろっ」

一度聞いた声、ウォーケンだ。彼はこの上の階にいるのだ。

「やつろ」

ヒエンが階段に向かおうとするとオーガーがそのまま、彼の前に立ちふさがった。

「どけよ。今度は骨も残さず、焼き殺すぞ」

指輪から軽く火を出す。

低脳なオーガーにも先の火力でそれを裕にできる事がわかってい

る。

しかし彼にも秘策があった。

突然、オーガーはアセガイを床へと直角に突き刺した。

するとヒエンが見えない障壁で後ろに下がらされた。

「な、なんだあ？」

ヒエンが見えない壁をパントマイムみたいに触る。

「魔法 結果 ですねえ。しかも、かなりレベルが高い」

その壁を叩いて答えるソリダスター。

「なら、魔法破り だ」

ヒエンは梟の杖を 結果 に当て、呪文を唱えさせた。

魔法は発動した、が 結果 は破られなかった。

「その杖より、レベルが高いですから」

ソリダスターは笑顔を浮かべた。

「ちえっ」

ヒエンは他にも指輪の火炎で狙ったり、再び 魔法破り を試みたりしたが徒労に終わる。

ソリダスターのほうはさっさと諦め、読書している。

結果 は強力な防御呪文であるが逆に、向こうからの攻撃もできないことを知っているからだ。

先ほどは雲を経由して雷を当てることができたが、オーガーにそ

の能力も意思もないのも見える。

と、突然、オーガーは床からアセガイを抜き、
結果を解いた。
驚くヒエンに、

「言われた10分。お前ら、行ってもいい」

と言い、オーガーは一階への階段へと向かった。

その後ろからソリダスターがシンボルを掲げた。

「麻痺」

階段をおりかけていたオーガーは、派手な音とたてながら1階へと転げ落ちた。

「ひでえ」

ヒエンが呆気にとられる中、ソリダスターは物静かに一階に降りてオーガーのアセガイを拾い上げた。

「珍しい、品ですから」

上を見上げて笑顔を浮かべるソリダスターであった。

三階に上がるとすでに人影はなく、開け放たれた窓から王女を鉤爪に捕らえた黒い大きな鳥が飛んでいくのが見える。

それは弓矢や魔法が届く距離ではない。

「ちえっ」

舌打をしてその行方を見守るヒエン。がすぐに見失った。

比べてソリダスターはその、あの王宮でビジョンで見た、部屋に興味を示し、色々とあさり始める。

部屋にある大きな机の上には開いたままの分厚い本がある、ビジョンのままだ。

その本をめくっているうちに、

「おや」

ソリダスターは声を上げた。

「なに、何かあった？」

ずっと空を見上げていたヒエンが聞きなす。

「こちらの地方信仰、『約定』と『解放』について」

ソリダスターは笑顔を浮かべた。

「『約定の神』は二人の婚姻を祝福する。

『約定の神』の前で結婚の儀式を行えば両者の愛情をより深くされ、結びつきが破れることはない。

儀式には『約定の神』によって祝福を受けた一組の指輪が必要である。

『解放の神』の力は『約定の神』の力を中和する。

そのためには、『約定の神』の前で行われた儀式と正反対の儀式を『解放の神』の前で行わねばならない」

「で、その二人の神はどこだ？」

ヒエンが尋ねる。

「探すの手伝ってください」

笑顔を、ヒエンに向けた。

ヒエンが発見した地図（ソリダスターはその本を読みふけていた）によって分かった場所はここから二日の場所。

早速、先の馬車に戻り、そちらに向かうように頼んだ。

途中、夜盗に襲われた二人は、運転手が震える中、逆に身包みをはいでみた。

はいただけで何も取らなかったが。

神殿は広い荒野にポツンとあった。

神殿といっても平屋の四角い建物で、一見は家にも見える。

その近くに大きめのテントが張ってある。

二人が近づいた気配を感じて中から、ホブゴブリン（ゴブリンよ

り大きな目のヒューマノイド）が三体現れた。

黒いレザー・アーマー、刀身が黒いブロード・ソードで武装している。

「待ちな」

その中の隻眼のホブゴブリンが共通語で喋り始めた。

「俺たちは黒い三星連と呼ばれる腕利きの傭兵だ。

ここにだれも入れるなという仕事を引き受けた。

立ち去れ、さもなければ、」

ヒエンが指輪の右手を振るった。ホブゴブリンたちの表面はきれいにあぶれた。

「「「あっちゃちゃちゃ」」」

ホブゴブリンたちは武器を手落とし、騒ぎ始めた。

「魔法の品だったらどうするんですか？」

ソリダスターは武器、焼け落ちた鎧を確かめた。

「どうだった？」

ソリダスターはため息をついてその剣を折った。

「単なるブロード・ソード（真直ぐな剣）です」

火を消し睨みつけるホブゴブリンたちにもう一度、ヒエンは軽く火を吐く指輪を見せた。

「次は、ウエルダン？」

神殿の入り口まで来た。

なんと、『グレイ・ロッド』がその脇に放置されていた。

「……罨？」

胡散臭い目で見るヒエン。

二人とも、この杖が邪悪なオーラを出しているのは分かっている。

「さて？」

確かめるように隅々を見るソリダスター。

「罨、毒はないみたいですが……」

「要る？」

「……やめときます」

ソリダスターにしては珍しく、魔法の品を放置した。

「杖に関しては何が起こるかわかりませんし。回収してもらいましょう。」

それにもっと素晴らしい杖が目の前にありますしね」

笑顔でウィンクした先はヒエンの持つ梟の杖であった。

「ホモか？」

ヒエンには自分に対してしたように見えた。

神殿の門の前に立った。そこには、

「この神殿の中、いかなる邪悪な力も封じられるべし」と記してあった。

「へえ、これでソリダスターの蒐集癖が収まるかもな」

「なるほど、ではあなたの色欲も収まるんですか？」

二人で笑わないギャグを言いながら中へと入っていった。

入ってすぐに分かったこと、それはそれぞれの持つ、魔法の品が力を失ったことだ。（結界 アセガイは置いてきた）

ヒエンの梟の杖、ソリダスターの信仰シンボルが効果をなくした。だからグレイ・ロッドは捨てられたのだろう。

が、ヒエンが右手を掲げると蛇の指輪は火を噴いた。

「これは、無理だな」

ヒエンの持つこれは魔法や呪術の品ではない。そのため力を失うことはなかった。

辺りを見ると右、左、真ん中と三つの扉が見える。

「どちらから行きますか？」

「右、かな」

その先は礼拝堂であった。

ずらりと木の椅子が並び、その奥には両手を合わせた神像がある。

「これは？」

「『約定の神』でしょう」

先ほどの本を取り出してソリダスターが答える。そして像を隅々まで調べた。

左手奥には通路があつた。

通路を進むと開けた場所に着いた。

こちらにも礼拝堂であろう、ずらりと椅子が並び、両手を広げた神像がある。

「じゃあ、こっちが、」

「『解放の神』」

ソリダスターが再びその隅々まで確認する。
左手に扉が見える。

その向こうは神殿の最初、入り口に戻っていた。左手から出てきた。

ぐるりと回ってきた事になる。

「残るは」

入り口の正面、真ん中の扉を静かに開けた。

そこにはウォーケンとリリアがいた。

が二人は仲睦まじく暮らしている雰囲気。

「やっぱ、実物もきれいだ」

リリアを見てヒエンがほくそえむ。

「それよりも、」

ソリダスターが彼らを指差した。

「もう、契約してるみたいですね」

なぜか、ソリダスターは笑顔だった。

二人の左手薬指にはそれぞれ指輪がされている。
と、ウォーケンがヒエンに気がついた。

「おのれ、俺たちの幸福を邪魔されてたまるか！」

「あなた！！」

ウォーケンはサックス（広刃短剣）を振りかざしてきた。

ヒエンが右手を構えた。が、

「彼らは契約が済んでるんですよ！！」

ソリダスターの声に動きを止める。

「恐らく、片方を殺せば後追い自殺を……」

サックスがヒエンに襲い掛かる。間一髪避ける。

「じゃあ、どうするんだよ」

「とりあえず、落ち着かせましょう」

そういうソリダスターはすでに扉の向こう、部屋から出ていた。

「卑怯もん！！」

ヒエンは再びサックスを避け、地面を転がるように奥へと進んだ。

梟の杖が役立たない今、彼には火を噴く指輪しか頼れるものはない。男と争い勝つ体力なんてありはしない。

いや、後一つあった。

ウォーケンが追う。

「へへ、」

ヒエンは不適な笑みを浮かべ、近くにあつた壺を転がした。

足を取られるウォーケン。もう一つ転がす。

ウォーケンは完全に転んだ。続けて近くの椅子をその上に下ろす。

椅子の足でウォーケンの両腕、首に腰を固定し、彼の動きを止めた。

「慣れたものですね」

その背後から襲おうとしたリアの腕を取り、戻ってきたソリダスターがほめるように言う。

「まあ、ね。女性といたらこんな台所での争いなんかしょっちゅうだよ」

魔法禁止区域で魔法使いと精霊使い、地形の利（？）を使い精霊使いの勝ち。

「くそ、なんで俺が」

ウォーケンを殴って気絶させ、それを運ぶ役をヒエンが行うこととなった。

いつもは杖より重いものを持たない彼には重労働である。

「ダイダイがいらないんです。あきらめてください」

ソリダスターはリリアのか細い腕を取ったまま、先へと進む。

「じゃあ、お前が運べよ。僕がそのリリア嬢をエスコートするから」

「あなたに儀式、できるんですか？」

「……」

『解放の神』の礼拝堂へ向かう。

儀式といっても簡単なものであった。

『解放の神』の前で指輪を外すだけであった。これは気絶するウォーケンのを取った。

無事、リリア王女を王宮へと返す事が出来た。ウォーケンは憲兵に突き出した。

無罪放免の上に、礼金までもらった二人、別の酒場にいた。

ヒエンは席に深く座り中空を見上げ、ソリダスターは本を読みふけている。

「どうか、したんですか？」

本から目を上げず、ソリダスターがヒエンに声を掛ける。

「ん？いや、僕があのまま、リリア嬢と再び、『約定の神』で契約したらどうなったかな、と思って」

「そんなこと、考えてたんですか？」

そうですね、あなたはこの国の王族として、迎え入れられたかもしれないですね。

一応、彼女には兄がいますから、王様にはなれませんが。

まあ、だから正規軍でもなく冒険者の仕事になったんですけどね。

ただし、あなたはリリア王女だけを、一生愛することになりますけど」

「あつ、それはいやだ。

長いこれからの人生、一人の女性に縛られるなんてまっぴらごめんだね」

ヒエンはテーブルの上のビールに手を伸ばした。

「そうですか？それはそれでいいことだと思えますよ？

本人は気がついていないのですから。他の幸せを。

まあ、その気になったら、声をかけてください」

ソリダスターは本に目を向けたまま、ポケットから何かをテーブルの上に置いた。

それは『約定の神』の指輪、一対であつた。

「やっぱり、もってきたの？」

ソリダスターのやることだ。

「ええ。この本だけがこれの効果を示しているのですから。やはり一緒にしておかないと」

ソリダスターが本を閉じた、それはあの分厚い『約定・解放』の本であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546o/>

Myth of contract and liberating

2010年11月6日21時55分発行